

天声人語

俳句における写実を強調した正岡子規だが、くすりとさせられる作品も少なくない。そんな句ばかりをコラムニストの天野祐吉さんが選んだのが『笑う子規』である。なかにはパロディーすらある。『めでたさも一茶位や雑煮餅』▼ことしの正月は、一茶の『めでたさも中位なりおらが春』のもじりでお茶をにごすか――。子規の心のなままで想像して、天野さんが付け加えている。正月の句には『雑煮くうてよき初夢を忘れけり』もある▼だじやれで遊ぶ子規の句が見つかって、本紙東京本社版で読んだ。1897年に新年会を開いて福引を引くし、景品に合わせて詠んだ句だという。『新年や昔より窮す猶窮す』。当たったのは急須のようで、「福引にキウスを得て発句に窮す」の詞書も添えられている。▼前年に脊椎カリエスの手術を受けた子規だが、このときは小康状態だったようだ。弟子の高浜虚子や河東碧梧桐らを連れ、人力車で出かけた新年会である。病床の貧しい生活すら笑いに包み込む。弟子たちを楽しませ、自分も楽しむ姿が浮かぶ▼東京・根岸の家を訪ねてくる人たちと、病床の子規は交流を続けた。郷里の後輩でもある碧梧桐は、先客がいようが病人が寝ていようが、いつも自分の家のよう上がりこんだと書いている。それでも外で会食したのは「ホンの数えるほど」だったという▼『糸瓜咲て痰のつまりし仏かな』。子規は、痰を切るために糸瓜水を愛用していたようだ。自分を仏に見立てた34歳の絶筆である。

2018・8・25